

いきいきまち

冬号

NO.88

～ みんなが生き生きと暮らせる街に♪ ～

「特集」

東京老人ホームらしさとは
「不易と新たなチャレンジ」

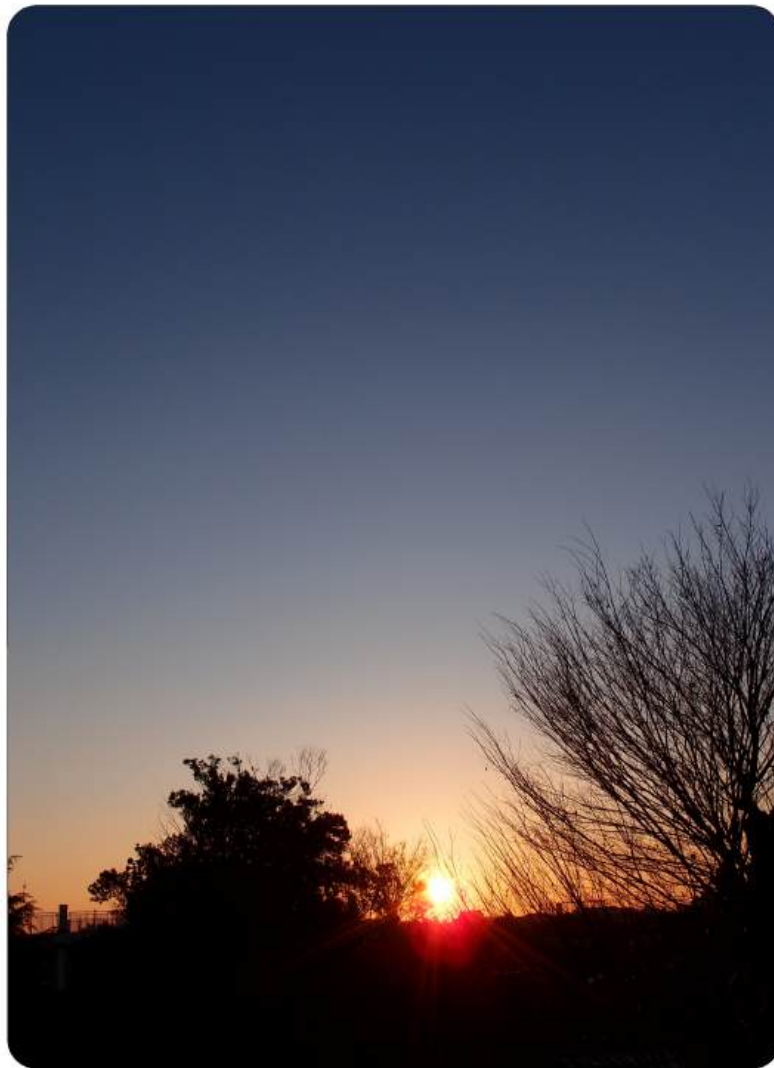
主な記事

連載

- 地域貢献・地域交流
- 栄養士のパレット 第五四回

ホームの行事食

朝礼拝から始まる一日の祈りがもたらす平安



日の出(2025年元旦 ホーム5階から)

発行



社会福祉法人

東京老人ホーム

「特集」東京老人ホームらしさとは 「不易と新たなチャレンジ」

ホーム長 高橋 睦

本誌八二号から「東京老人ホームらしさ」をテーマに、七回に渡り特集を組んで参りました。最終回となる今回は、歴史の振り返りも加えて、「東京老人ホーム」の思いを具現化する実践から、これからについて「東京老人ホームらしさ」について述べてみましょう。



教会の救援本部はスペイン公使館の敷地内にバラックを設

二〇二三年一二月 当ホームは創立百周年を迎え、「私たちの未来へ希望へのスタート」をテーマにお祝いし、新たなスタートを切り二年目になります。百年を振り返り、先達の働きを資料などで改めて読むと、当時のルーテル



寄贈されたラジオを囲んで
1940年代（60周年記念誌より）

置し、スタイワルト宣教師、本田牧師の二人は、対象となる被災した高齢者がいる臨時の病院などを回り、声をかけ、最初の入居となったと記されています。「待っている」ではなく「出かけていき」、何をおいても手を差し伸べるといふこと、そうせざるを得ない思

いがそうさせるということ、その根本なのです。

制度に忠実に従うと

創立から四十年以上が過ぎ、ホームでの生活が安定してきた頃、私たちの先輩が地域に目を向けること、さまざま必要な支援が見えてきました。そこで地域の高齢者にとって何が必要か、実態を調査し、配食サービスや緊急通報の仕組みなど、いわゆる地域ケアサービスの先駆けとなる一つひとつの実践に取り組んできました。

その後「措置の時代」となり、政教分離つまりは、国からの支援・庇護を受けられる福祉になり、宗教とは

分けられる時代となりました。ホームだけでなく教会が設立した施設は、理念の基本になっているキリスト教との関係が微妙になり、設立時の信仰理念が伴う宗教的色彩は弱まっていきました。公的支援がありますから経営基盤は安定していきませんが、制度に基づきどの施設も他と同じようなサービスを求められるようになりました。

ルーテル教会との関係は、金銭的援助はなくなりましたが、婦人会（現：女性会）を中心としたボランティアの協力などは、今でも行われ続けています。そこには、「教会がはじめたホームだから」という思いで繋がっている

のです。

介護保険制度になると、民間の事業者も参入し、より一層同じ介護保険サービスを提供することが求められようになりましたが、「その中で選ばれるためには？」という課題が改めて求められるようになったのです。

どのような個性（「東京老人ホームらしき」）がホームなのでしょう。

これまでの歩み

「東京老人ホームらしきとはどんなことですか？」という問いの前に、「東京老人ホームらしき」は、なぜ必要なか考えてみました。

およそ百年前のルーテル教会は、関東大震災が起こったとき、もちろん教会も同様な状況下にも関わらず、被災した高齢者と



母子に住む場所を建て、提供し、その住まいを「ホーム」と呼び、支援を始め、現在の全室個室の住まいになりました。

「ホーム」は、二度の移転の時も、その後、百年間いつも必要な「ホーム」でした。

現在はホームも老人福祉法や介護保険法に基づく施設なのでその法令に遵守した施設ですが、そのうちであっても教会が必要として創った施設であることには違いはなく、行政の計画とは別の視点で歩んできているのです。

ですから私たちは、この基本となる「理念」や「使命」を踏まえて「どのように利用者」に寄り添うことができるか”が重要と考えています。

介護や相談支援の質を高めるための研修や研究は、当然必要なこととして行っ



熊本の慈愛園で開催された研修会
2023年夏（ルーテル社会福祉協会）

ていますが、一方で、「理念」や「使命」の上に、それらの専門性があることを自覚し、職員は入職の時からこれらについて学ぶ機会を設けて同じ方向を目指しています。

経験年数別の個々の階層別研修や、年二回の全体研修会もそのために必要な機会ですし、同じくルーテル教会が創った全国の施設との交流や研修もその一つです。

二〇一一年から継続して行っている大阪の「うるて」のホームとの合同研修は、それぞれの法人がそれぞれ

れの「理念」について学び、どのように「継承」するかということを目的として続けられています。

この研修で参加者は、時間をかけて次の世代への理念継承の視点での育成の仕組みとして、何をどのようなことが必要か、検討を行っています。参加者の新たな気づきや理解を、職員間で共有できるかを考えますが、研修を担当するスタッフは、講義などで説明するのではなく、参加者自身で考える時間を提供します。この研修の成果が、階層別の理念研修の見直しになっています。

同じように熊本や別府にあるルーテル教会が創った施設との交流は、毎年行われています。

この経験も私たちならではの、この交わりも



「らしき」を育てているようです。

今のホームに見る「らしき」

本誌八二号からの特集では、事業所・部署・委員会から「らしき」について様々な視点から述べてきました。

軽費老人ホームでは入居者が地域の一員としての生活を。ホームヘルプの事業では地域の利用者が住み慣れた地域での生活を。特別養護老人ホームでは入居者が終の棲家として。ひまわりの会も地域の方がその地域の子供たちに向けての活動を。養護老人



皆さんで讃美歌
(60周年記念誌より)

ホームは、ずっと安心して生活できる住まい。総務は、それらを支える職員の幸せを願った職場環境の整備。と、「地域の一員として、またその役割に取り組む法人として」今行わなければならぬことという共通した思いがよくわかります（八二号から八七号）。また本誌五ページに掲載されている、入居者のための礼拝もその一つです。

百年前から変わらないもの（理念）を、その時その場のニーズに合わせて工夫をしてきた「不易とチャレンジ」こそ、ホームらしきを創り上げているのであり、特にその「チャレンジ」の気持ちや「らしき」の表れなのでしよう。

私たちは、その時々、ニーズに気づき、駆け寄り、



片付け支援事業

具体的な取り組みへと実践してきました。創立百周年に向かう時期には、地域の現状を踏まえた取り組みとして現在必要なことは何か、私たちは今何をすべきか、ホーム全体で様々な視点から考え、具体的な取り組みとして、「ひまわりの会」や「片付け支援事業」を行っています。

新たなチャレンジ

現在も、繰り返し起こる

自然災害の中で私たちは何を求められているか。昨年の職員全体研修会で改めて東日本大震災を振り返り、教会や私たちは何をしてきたかなど



市民祭りへの参加
地域のニーズは何だろう

を学ぶ機会を設けました。また、そのようなときに私たちの行うこと、できることは何かを考え、また、先駆的に地域貢献を行っているベタニヤホーム（開設時のもう一つの母子生活支援施設）から学んだり、直接地域の方々の声を聴くために、市民まつりに参加しました。

調査や意見徴収などで表出された課題の解決を具現化する取り組みは、制度に捕らわれずに、必要なことは何かを考えて実践へ！

私たちは、新たな取り組みに向けてその準備に取り掛かっています。西東京市民、関係する教会などさまざまな方々とのコミュニケーション創りという、希望へのスタートは始まっています。東京老人ホームらしく。

東京老人ホームらしき

『朝礼拝から始まる一日の祈りがもたらす平安』

日本福音ルーテル教会(前保谷教会)牧師 平岡仁子

朝礼拝の始まりと歴史

一九二三年九月一日、東京での死者が一〇万人を超える空前の震災が関東地方を襲い、その後、日本福音ルーテル教会は直ちに被災者救援に当たりました。同年一二月、老人八名を収容した老人ホームを開設、その時から毎朝の礼拝が始まりました。当初は月々土毎朝、朝食前に礼拝を行い、施設長の松永千マ氏を中心にルーテ



創立当初から始められた礼拝 (60周年記念誌より)

ル教会の牧師・神学生たちが協力しました。一九七一年頃にはホーム三カ所毎月金週五回となり、内週四回を保谷教会牧師が、そして都内の牧師たちが月一回担当しました。その後、パンデミック直前まで全施設合同による月々金週五回の朝礼拝が牧師たちによって続けられました。

入居者にとっての朝礼拝

私は二〇〇四年から二〇二〇年(パンデミック直前)まで隔週一回、朝礼拝を担当しました。二〇〇四年当時は一階会議室を会場として、軽費老人ホームの出席者を中心に合同礼拝が行われていました。その後、会場を三階に移した

ことで特別養護老人ホームの出席者が減少、反対に養護老人ホームの方々の出席が増加しました。

毎朝の礼拝は入居者の方々の一日にリズムを作り、また、施設間を超えた交流を生み出しました。短い時間であったとしても、毎朝の礼拝で互いに挨拶を交わす仲間が与えられ、また当時、音楽は入居者の方々によるボランティアでした。「音楽大学で学びオルガンを弾けます。」と思いを超えた出会いも生まれました。

パンデミックを経て続く朝礼拝

パンデミックによる中止を経て五階食堂で週二回の合同礼拝が再開された今、



この日は平岡先生による礼拝でした。振り返って見れば朝礼拝を通してたくさんのお出合いがありました。朝礼拝への参加は自由です。だからこそ、求めて入居者の方々は出席されるに違いありません。

軽費ホームの入居者であったAさんは言われます。「ホームに入って毎朝の集会でイエス様についてのお話を聞いている内に、自分が目になったのは神の御業が私の上に働いているのだと思ふ様になり、私の心は恨みから次第に深い意味を噛みしめるように変わっていったのです。」(一九九六年召天)

百年続く朝礼拝はこれからも、確かな拠り所と変わらぬ平安を与え続けることでしょう。



地域貢献・地域交流

いきいきさんデー報告



十月一九日(日)いきいきさんデーが開催されました。

雨天の中、多くの皆さまに

足を運んでいただきました。(ご来場者一二六名)。今年は、私たち法人が大切にしている地域貢献専門性の発揮の場である、いきいきさんデーがこれから先もずっとつなげていき、笑顔で明るくいれるようお願いを込めて「笑顔のバトン つなげていこう」を

テーマに地域の皆さまと世代間交流を図ることができました。

法人の取り組みや施設見学、高齢者疑似体験を通じて高齢者福祉を広く知っていただく機会となりました。

田無工科高等学校による生演奏、保谷第二小学校によるダンス披露、フラナーナラーによるフラダンス披露、TANASHIソーラン会によるソーラン節、国際文化理容美容専門学校

によるネイルアート、どろんこ作業所、ワークショップウーノ、模擬店も大盛況でした。

天候は良いとはいええませんが、とてもキラキラしてくださった皆さまが、とてもキラキラしていて笑顔が、まぶしかったです。心に残る素敵な一日となりました。

ご来場いただきました皆さま、ご協力いただきましたました団体の皆さまに心から感謝を申し上げます。今後も地域の皆さまとつながる場となるよう努めてまいります。



『キャロリング』



一二月二四日(水)、クリスマスイヴの夜、日本福音ルーテル保谷教会の坂本牧師と教会の皆さんが、キャロリングで来園されました。

讃美歌が施設内に静かに、そしてやさしく響き渡り、利用者の皆さんも

一緒に口ずさみながら、イエス・キリストの誕生を祝うひとときを過ごすことができました。

保谷教会は、およそ七〇年前にホームの礼拝から始まった教会で、家族のような関係の皆さんとの交わりの機会です。

普段とは少し違った厳かな雰囲気の中で、自然と笑顔がこぼれる場面も見られ、施設全体が歌声に包まれた時間となりました。

クリスマスの意味を改めて感じられる、心あたたまるひとときとなりました。

クリスマス



第五回 栄養士のパレット

いろいろな食の話題を紹介するコーナー



ホームの行事食

短い秋が終わり寒さが身に染みる季節となりました。今回は東京老人ホームの「冬の行事食」の紹介をしたいと思います。

大きな行事のお食事は、一二月一三日の『創立記念日』と『クリスマスランチ』お正月の『おせち』などがあります。(他にも毎月



養護・軽費 創立記念日



特養 クリスマスランチ

の誕生日食・選択食・年越しそば・鏡開きのおしるこなどがあります。)

一〇二回目の創立記念日をお祝いする料理は、お赤飯、お刺身盛り合わせ、茶碗蒸し、紅まんじゅう、など二年で一番豪華なお食事になりました。

『クリスマスランチ』のメインはチキンステーキや、



養護・軽費 クリスマスランチ

ミートローフなど、クリスマスらしい料理を楽しんでいただいています。また料理・ケーキと共に、食堂の飾りつけ、職員もクリスマスの衣装でクリスマスランチを盛り上げています。

また普段の食事はもちろんですが行事食では、利用者の咀嚼・嚥下能力に合わせた食形態で、安全に召し上がって頂ける食事を提供しています。



特養 クリスマスランチ
ペースト食



お正月「おせち」

写真は『クリスマスランチ』のペースト食(咀嚼・嚥下能力の低下があり固形物の食事が難しいかたの料理)になります。

固形物の食事が難しくなっても、同じ内容の食事を、同じように楽しんでいただけるよう取り組んでいます。



市民祭りへの参加 報告

十一月八日今年も生活相談員中心に、「西東京市民まつり」に出展しました。「あなたが思う高齢者は何歳ですか?」というアンケートを実施しながら、防災ミニライトを配布し、地域の方との交流を図りました。老若男女問わず二百名以上の方の回答は、「高齢者は六五歳」という定義がある中で、多くの方が「七五歳以上」と回答。また、老人ホームに関心を向けてくださる方もおられて、その場で相談を受けることもありまし。老後に不安を抱えている方が多いという実感です。

また、もう一つの目的である地域イベント「わいわいダイニング」の開催宣伝も行いました。「私たちと一緒に食事しませんか?」というコンセプトでホームに足を運んでいただき、地域の方のニーズをお聞きする取り組みです。



市民まつりへの出展からまた新しい第一歩が始まっています。常にわたしたちが地域に何ができるのかを試行錯誤をしています。次号に「わいわいダイニング」の様子を報告させていただきます。楽しみにお待ちしております。

クリスマス礼拝とコンサート

一二月二二日(月) 静かで落ち着いた時間の中で、坂本牧師の司式で入居者の皆さまも「クリスマス礼拝に参加させていただきます。」

続いて「おしゃべり音楽会」の皆様によるクリスマスソングを中心としたコンサートを開催。

美しい歌声が会場に響き、利用者の皆さんはじつくりと耳を傾け、また口ずさみながら楽しんでおられます。

演奏後にはアンコールの声もあがり、あたたかな拍手に包まれる場面も見られました。

た。音楽を通して季節の彩りを感じられる時間が流れていました。



クリスマス礼拝



クリスマスコンサート

編集後記

師走は「あつ」という間というイメージがありました。今年度残り三か月も同じように「あつ」という間なのでしようか。

特集は「東京老人ホームらしさ」のまとめを、松尾芭蕉が「奥の細道」で体得した概念「不易流行」をヒントに述べました。平岡牧師の「朝礼拝から始まる一日」は、変わらない事の柱です。いきいきさんデーは、ホームと地域の皆さまとの大切な交流の機会です。中庭をメインにさまざまな方々との笑顔の一日でした。来年の企画もお楽しみに。



「わいわいダイニング」の報告の予告(次号)が掲載されています。昨年一二月に開催し、盛況だったようです。報告が楽しみです。



お問い合わせ
住所 千202-0022 東京都西東京市柳沢4-1-3
電話番号 042-461-2230
FAX 042-461-2280
ホームページ <https://www.tokyo-rojin-home.or.jp/>
発行 2026年1月31日 第88号(年4回発行)
☆ご意見ご要望をお寄せ下さい!